

大阪の坂道研究 無名坂にネーミング

第2章人名坂を創設する

辻本 伊織

【目的】

前々回の平成25年度研究成果報告会では「**第1章アベノの坂10選**」として発表した「**大阪の坂道研究**」の**第2章**である。大阪に存在する趣きある無名の坂道を見だし、歴史（由緒・巷説）や形態などからそれにふさわしい名称をつける。その名称によって人々の注意や関心を喚起し、人口に膾炙させることにより観光資源としての機能を発揮できるものにしてゆくの目的である。今回の第2章では大阪にはほとんど存在しない人名を冠した坂（人名坂）を創造することにする。切り口は変わるが、通底しているのは坂道を『**そこにある観光資源**』として『**低予算で活性化**』するという戦略である。無名坂は名づけられたことにより単なる傾斜した道ではなくなり、発信する記号をもった観光資源となる。それとともに由来となった人物も顕彰されることとなる。

※坂道に関する定義、坂道リサーチの方法、他府県の坂道状況、日本人の坂道観などは第1章と重複する部分が多いので**別添資料**とした。ぜひご参照いただきたい。

【内容・結果】

1、場所をどこに選定するか？

大阪市内の坂道はほとんどが上町台地の外縁に存在する。有する区域は住吉区・阿倍野区・天王寺区・中央区に偏っている。坂の有効利用において大阪は他府県の成功事例に見習うべき点が多いのが実状である。唯一の成功事例は天王寺区の天王寺七坂であろう。今回は区割りでなく市内全体からふさわしい無名坂を発見することとなる。

2、どのような人物を選定するか？

大阪人であり、大阪に貢献した人物であるが、現在あまりスポットライトをあてられることがなくなっている人物。歴史上の人物というよりはその人が活躍した時代がまだ人々の記憶にある人物。あるいは名前ばかり有名であるが実体はほとんど知られていない人物。ということ念頭に今回のアプローチとしてみた。

3、具体的には誰か？

「まず人名ありき」で試みると、坂を選んでから妥当なネーミングを付与するのは効率が断然悪くなる。それでも今回候補の人名坂創設10例ほどから精選して代表的な3坂と3名を発表するものである。

※これらはすべて私の独断的命名によるものなので、参考事例・試行事例として、ご寛恕いただければ幸いである。

①庄野坂 大阪市住吉区帝塚山西1丁目

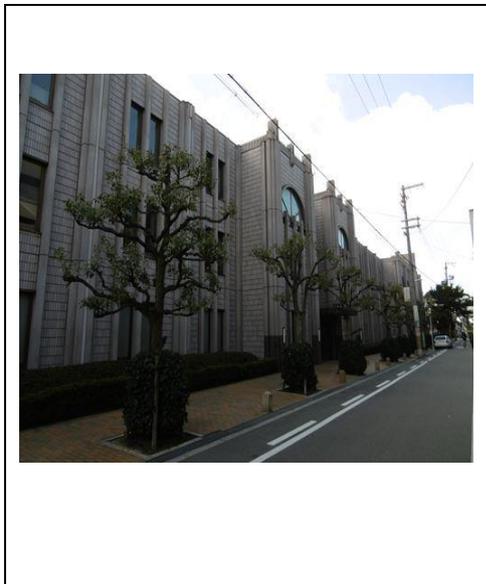
帝塚山地域興隆の原泉 庄野父子（庄野貞一・英二・潤三）を顕彰して

明治時代は原野であった帝塚山地域は、現在大阪有数の高級住宅地になった。

もちろんそれは地元有志の力が大きいのだが、それだけではなく文教地区としても認められているのは、帝塚山学院の初代院長庄野貞一や子息の英二・潤三などの活躍が大きく影響していることは間違いない。そういう意味で学習院を模したと言われる帝塚山学院は古墳とともにこのあたり一帯のシンボルなのだ。

帝塚山学院前の道をまっすぐ西へ行く南海電車を越え、帝塚山地名の由来となった前方後円墳を越えたあたりから、長く緩い下り坂となる。この坂を庄野父子をリスペクトして庄野坂と名づけたい。

帝塚山学院正面全容



庄野坂 西から東への展望



帝塚山学院

庄野貞一が地元から求められて初代院長となった帝塚山学院も、本年創立100周年を迎える。父に続いて院長になった庄野英二は児童文学者としても有名。弟の潤三はこの帝塚山学院を舞台とした『プールサイド小景』で1955年芥川龍之介賞を受賞し、第三の新人と呼ばれる文学者集団の中心的存在として活躍する。

彼が住吉中学に学んだときの教師に日本浪漫派の詩人伊藤静雄がいる。また小学校（帝塚山学院小学校）以来の友人に芥川賞作家の阪田寛夫がいる。上町台地にはこれら文学者のモニュメントが数多い。

庄野潤三 1921年～2009年

芥川賞受賞作の『プールサイド小景』は帝塚山学院のプールへ子どもと泳ぎにくる親子から話が始まる。小市民のなごやかな日常生活・・・その裏に隠された真実が徐々に明らかになってくる。

都会風に洗練された文体が返ってドロドロした日常生活の実態を描き出すのに効果を上げている。この短編小説の冒頭の電車は学院の横を走る南海電車を指している。

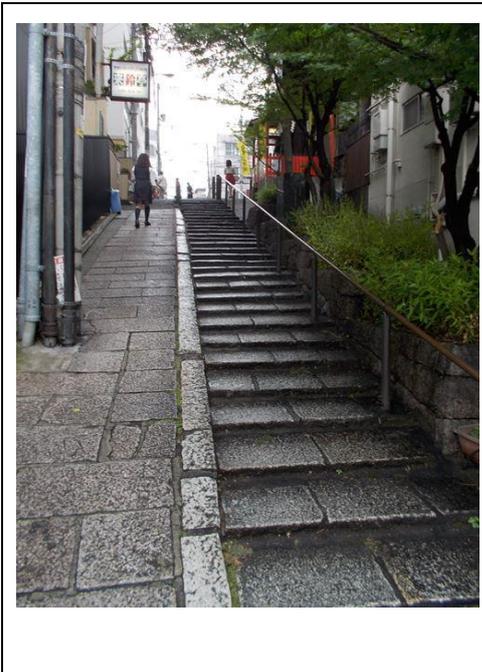
②直木坂 大阪市中央区安堂寺町2丁目

文豪 直木三十五を顕彰して

言うまでもなく直木三十五は芥川賞とならぶ直木賞という文学賞の由来で有名である。しかし、この人が大阪出身であることを知らない人も多い。ある意味一時代を劃し天下をとったとも言える作家であり、その全国区的な容体が大阪色を消しているのではなかろうか。彼はこの坂のすぐ近辺で育った。坂の上からは長堀通りを含む空堀一帯（ノバクと呼ばれた）が見下ろせ、例えばそこの住人であった花月亭久里丸（漫談の創始者であり小学校同級生）と石合戦をしたことなどのエピソードもある。

この坂ほど直木にふさわしい坂はないとの思いをこめて直木坂と名づけたい。

長堀通りより見上げる直木坂



直木三十五執筆スタイル



榎木大明神の祠

祠は傍らの木より名づけられた榎木大明神。実際は槐の木であるがなぜか榎木大明神と呼ばれている。石段状の坂の途中には直木の代表作『南国太平記』文学碑がある。生家は谷町6丁目付近であるし、居宅は坂をあがって右へ少しの場所にあった。このあたりは安堂寺町である。

この榎木は代が変わっているが、往古より熊野街道や伊勢街道を往還する旅人たちのランドマーク的役割をはたしてきた。石段をあがると、まっすぐ北へ進む道があり、これがお祓い筋である。友だちがおり、貸本屋があり、親切な庵主さんがいて直木の幼少年期の小世界は実にこの範囲に色濃く残されている。

直木三十五 1891年～1934年

文藝春秋を創立する菊池寛と組んで時代小説の大ブームを起こす。新聞や雑誌を連載多数かかえ書きに書きまくる流行作家となるが、その頂点で宿痾の肺疾により夭折。稼いだ以上に浪費したので彼のキャッチフレーズは「芸術は短く貧乏は長し」。奇想天外ハチャメチャの生涯を送った。

彼は原稿執筆をほとんど写真のように腹ばいでこなした。この習慣が致命的な肺疾を招いた一因かもしれない。

③松鶴坂 大阪市住吉区帝塚山西4丁目

巨匠 笑福亭松鶴（六代目）を顕彰して

阪堺電軌軌道阪堺線の東粉浜停留場から東へだらだらと緩やかにあがっていく坂。落語家笑福亭松枝が書いた『ためいき坂 くちぶえ坂』という六代目松鶴とその弟子たちの生態を活写した実録小説はこの坂が舞台である。タイトルだと坂は二つあるようだが実際は一つの坂であり、このゆるやかな坂を指している。行きはなんとも心苦しく、帰りは口笛を吹きたくなるような開放感。それが彼・松枝にとって旧松鶴邸へ通じる坂の日常であった。

六代目松鶴が数々の逸話を残し、大勢の弟子たちと過ごした家は、現在弟子のひとり鶴瓶によって改築され落語をはじめとしたイベント会場『無学』となっている。

現在の無学 元松鶴邸



無学前から松鶴坂の東方向を見る



無学

元の家屋の面影は感じられない。ごたごたした長屋風の古い屋敷は、洒落た綺麗な家に生まれ変わった。鶴瓶のこの家を保存するという気持ちも素晴らしいものがある。だからこそ、ここが六代目笑福亭松鶴とその弟子たちの笑いあり、怒りあり、涙ありの場所であったことを後世に伝えたい。この家の前が坂である。松枝の言うところのまさにためいきとくちぶえの対立する心理・感情をかかえた坂であるとの表現・定義を尊重しながら、それを生み出した矛盾の本体である六代目をリスペクトして松鶴坂と名づけたい。

笑福亭松鶴 1918年～1986年

六代目松鶴は衰えきった上方落語を復興させる原動力となった四天王の筆頭である。豪放に見える芸風・脳梗塞を患ってからは、いささか呂律のまわらぬのを酒飲みの話で紛らせていたが、私が学生時代聞いていた頃は立て板に水のような実にあざやかな能弁であった。また『らくだ』などで東京の落語家たちに一目置かせる、巨匠と言うにふさわしい落語家でもあった。